
Choco for Two

榛奈 伶奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Choco for Two

【Nコード】

N3229B

【作者名】

榛奈 伶奈

【あらすじ】

幼馴染の瑠璃のことが気になって仕方のない宏樹。彼女からバレンタインのチョコレートをもらえないかと悪戦苦闘するのだが……

「ね、瑠璃からはチョコもらえないの」

「何、ふざけたこと言ってるの。ヒロくんは、バレンタインっていう言葉の意味を知らないの」

呆れたような口調でそう言いながら、瑠璃はあたりにちらばっている書類の山を片づけている。

「冗談いってる暇があったら、これ片づけて」

そう言っただんと目の前に置かれたものは見て見ぬふりで、宏樹は瑠璃にくださがっている。

「じゃあ、これ全部片づけたらチョコくれる？」

「あのね。バレンタインって女の子が好きな子にチョコあげるの」

「それはわかっているよ」

「じゃあ、私の答えもわかっているでしょ。隣同士で小学校からずっと一緒。でも、だからって、ヒロくんはチョコあげる義理はないわ」

瑠璃のその言葉に、宏樹は恨めしげな視線をむけている。しかし、そんなことでくじけるということはないだろう。宏樹の座っている椅子の後ろにある箱の中身を知っている彼女は、これみよがしなため息をついてもいる。

「ヒロくんは、生徒会室をチョコの箱で占領しているの。八方美人であちこちから貰っているのに、その上まだ請求するの」

「だって、瑠璃からの欲しいんだから」

「あなたの熱烈なファンに知れたら殺されるわ。そんなのはまっぴらごめん」

そう言っただ瑠璃はこの話は終りとばかりに打ち切っている。そのことにすっかり落ち込んでいるような宏樹をからかうような声。

「会長、またふられてる」瑠璃先輩、休憩してお茶しませんか」

「あら、井上君。そっちは片付いたの」

「当然ですよ。後は会長の仕事だけ」

「慎也、それ以上、瑠璃にくつつくな」

どこか脅しともとれそうな宏樹の声を無視するかのように和気藹々と喋っている瑠璃と慎也。そんな二人の様子にふてくされたようになった宏樹は、目の前にあるものとの格闘を始めているのだ。やがて部屋の中にただよってくる甘い香りと陶器の力チャカチャ触れ合う音。そして、瑠璃のよく通る声が部屋の中に響いているのだ。

「皆さん、お茶が入りましたよ。ティータイムにしませんか」

彼女のその声に、部屋のそこかしこにいた面々が集まってきた。そんな中、瑠璃はてきぱきとコップを手渡している。

「瑠璃ったら本当に気が利くんだから。嫁においで」

そう言いながらむぎゅとばかりに抱きついてくる友人の言葉にも動じるところもなく、瑠璃はさらりと切り返している。

「嫁にいこうかしら。なんてったって、やんちゃで我儘この上ない困り者がいることだし」

「おいで、おいで。瑠璃だったらいつでも歓迎。あんな自己中ほっとけばいいの」

「はい。じゃあ、これは香織の分。これで全部だったかしら」

自分のところにはまだ何も持ってきていないのに、これで全部という瑠璃の言葉。それに一瞬、うるたえたような宏樹だが、そのことを言葉にするのもどこか癪にさわるのだろう。勝手にすれば、というような顔で和気藹々とティータイムを楽しんでいるメンバーの方を気にしながらみてみぬふりをしている。そんな宏樹のところに瑠璃は他のメンバーに渡したコップよりも大き目のカップを持ってやってきている。

「はい。これがヒロくんの分」

「どうして、俺のだけ違うの」

「あら、いらぬわいの。じゃあいいわよ。向こうに持っていくから」
ちよっとすねたような瑠璃の声に、宏樹は慌ててカップを受け取

っている。一口、中のものを飲んだとき、おかしな顔をしている彼を瑠璃は知らん顔をしてみている。

「やっぱり瑠璃の紅茶って最高」

「香織ぐらいよ、そんな嬉しいこと言ってくれるの」

語尾にハートマークがついているような明るい声でこたえる瑠璃。その会話の端々に、何か腑に落ちないという表情を浮かべている宏樹。

「会長、どうしたんです。瑠璃先輩の紅茶、おいしくないんですか」「い、いや。そんなことはないさ。瑠璃の紅茶は最高だよ」

そう言うなりカップを脇にやり、先ほどの続きを始めた宏樹の姿に、慎也は何も言えないようだった。どうにも尋ねるといふ雰囲気ではない。そのためか、慎也は宏樹にちょっかいをかけるのを諦めると、楽しげに話しているメンバーの輪の中に入っている。彼が自分のそばからいなくなったのを確かめると、宏樹は再び、瑠璃が自分に渡したカップに口をつけていた。

コクン

どう考えてみても、紅茶の味はしない。ちょっと苦味を感じさせる甘い味。

「紅茶じゃないよな」

ポツリと宏樹がそう呟いたとき、自分の後ろから手を回してくる相手があった。

「バレンタインだもん」

自分の耳にそつと囁きかける相手の声に気がついた宏樹は、カップの中身にようやく思い当たっていた。それは紅茶ならぬシヨコラチヨコレート。おそらく、それが瑠璃なりの心遣いだとわかったのだろう。

「瑠璃もそれならそう言えばいいのに」

「だって、くやしいんだもん。まるで言われたからあげたみたいで」
拗ねたようにそう言う瑠璃の頭をコツンと小突いた宏樹は、カップに残っていたシヨコラを一気に飲み干していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3229b/>

Choco for Two

2010年11月13日02時28分発行